

苦難の意義

村上トシ子

人は誰しもが一冊の本が書けると言う。自分の事、即ち自分史を書けば良いのだが、これがなかなか難しい。本当の事を赤裸々に書くと自分を、家族を、そして回りの人々を傷つけてしまう。さりとて、表層だけをなすつて書けば、空々しく、感動本はできない。

悲しみや、苦難の中に辛い人生を送っている人、つまり進行形にある人は、直視できずに素通りしてしまうだろう。当然の事である。

この私にも今はどうしても書けない（公表できない）ものが二つや三つある。それらが解決出来た時に初めて苦難の意義が書けるであろう。情けない話である。

『そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです』

（ローマ五・3〜4）